

熊本県阿蘇地域における夏秋トマトの9葉齢セル苗直接定植による可販果収量

○藤本憲太郎・宮本哲郎¹⁾・岩本英伸²⁾

(熊本農研セ高原・¹⁾ 大阪事務所・²⁾ 上益城地域振興局)

【目的】

熊本県阿蘇地域の夏秋トマト栽培では、近年、大規模農家を中心に育苗の省力やコストの低減等を目的としたセル苗（3葉齢）の直接定植が行われている。しかし、セル苗直接定植では慣行のポット苗（11葉齢）での栽培に比べ初期の過繁茂や、収穫開始の遅れによる減収等が生じており、対策が必要である。

そこで、セル苗直接定植の生育安定および可販果収量増加を目的に、苗齢を進めて定植した場合の生育と収量の関係を明らかにした。

【材料および方法】

試験は2018～2019年に高原農業研究所(阿蘇市一の宮町、標高543m)で実施した。供試品種は、阿蘇地域慣行の穂木「りんか409」(サカタのタネ)、台木「グリーンセーブ」(タキイ種苗)を用いた。

育苗は、9葉齢苗は50穴、6葉齢苗は72穴、3葉齢苗および11葉齢苗は128穴セルトレイを用い培土は「与作果菜類専用培土」を使用した。定植日を揃えるために育苗期間の長いものから順に播種、接木(11葉齢は3月22日に「ひむか培土」を用いてポリポットに鉢上げ)し、いずれの処理

も4月17日に定植した。育苗中は床土の表面が乾く度に灌水し、生長点の葉色が薄くなった際は液肥による追肥を行った。栽植様式は、単棟ハウス(間口6m, 奥行15m)において畝幅190cm, 株間55cm, 2条植え, 1本仕立てとした。それぞれの処理は1区5株3反復で行った。

【結果および考察】

栽培初期の生育は3葉齢(128穴セルトレイ)での定植がポリポットに鉢上げした11葉齢(以降「ポット苗」)での定植に比べ茎径が太く旺盛となった。9葉齢(50穴セルトレイ)での定植の初期生育はポット苗と同等であり、3葉齢での定植に比べて初期の生育が抑えられた(図1)。

9葉齢での定植はポット苗定植に比べ収穫開始は2～7日遅れ、可販果収量は1～11%減少したが可販果率の低下は見られなかった。3葉齢および6葉齢での定植に比べると収穫開始が早まり初期収量、可販果率および可販果収量が増加した(表1, 図2)。

9葉齢でのセル苗直接定植は慣行のポット苗定植に比べ可販果収量はやや少なくなるが、3葉齢でのセル苗直接定植に比べ増加することが明らかになった。

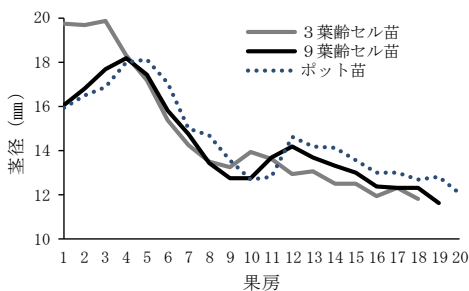


図1 栽培終了時の茎径 (2018)
注) 各花房下の節間をノギスを用いて測定。

表1 収穫開始日、収穫重および可販果率(2019)

試験区	育苗日数	収穫開始日	総収穫果重 (kg/a)	可販果率 (%)
3葉齢セル苗	22日	7,03 (+26)	1365	65.1
6葉齢セル苗	33日	6,24 (+17)	1548	70.5
9葉齢セル苗	42日	6,14 (+7)	1583	75.8
ポット苗	49日	6,07	1776	73.3

注) () 内はポット苗を基準とした日数差。

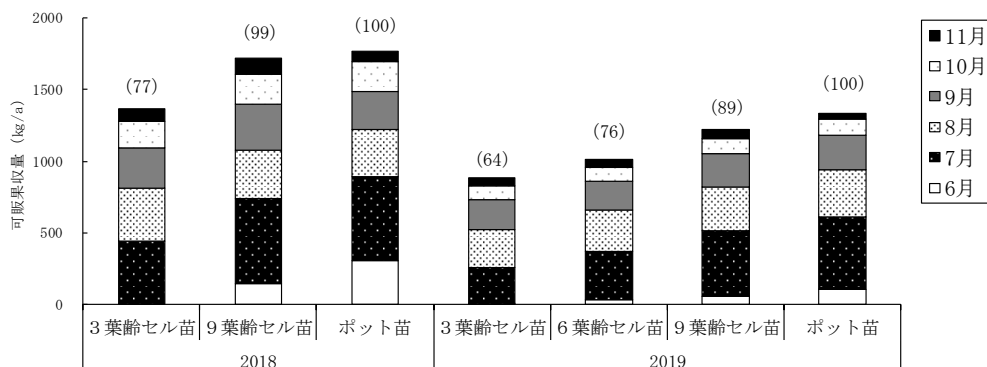


図2 月別可販果収量
注) () 内はポット苗を100とした時の割合。